

しての議論が盛りだくさんにあり、人権の尊重を中心に院長は実践されていたとつくづく感じています。

自分のことを心理職（サイキョジスト）と位置づけながらも、編集者だったり、九州リハビリ大学の OT(作業療法士)実習生受入れの仕事をしていただいたり、また、院長発案で当時は珍しかった長期の夏休みを取得させていただいたことなど、幸せな社会人生活の始まりだったと院長に感謝しています。

一番最後にお目にかかったのは、05年6月の「多文化間精神医学会」のことで大阪から見えた白樫（馬場）万寿さんと一緒に、「希望が丘物語」のスライドを懐かしく見て、院長のお話をお聴きしました。

この世におられなくなったことはとてもさびしいことに思われます。私はこのようなことになってしまったから、はじめて、ちゃんと感謝のことばを院長に述べていなかったことを悔いています。

（宗像市市議会議員・ふくおかネットワーク代理人）

## 佐々木勇之進先生との忘れられない思い出

小林 隆 児

勇之進先生との思い出で真っ先に思い浮かぶのは、私が昭和56年5月から1年間福岡病院に常勤で働いていた時のことです。昭和50年春医師になってからずっと週1日福岡病院にお世話になっていましたが、それまでは半ばお客さん気分で仕事をしていたので、正直言って福岡病院への愛着もさほど感じていなかったと思います。

常勤になる少し前だったと思います。当時、勇之進先生の頭の中には近い将来コンピューター化の構想があったのではないかと思います。私は福岡大学で外来患者のデータをコンピューターを用いてまとめる作業に取り組んでいました。どんな思いつきで言ったのか、今では定かではありませんが、勇之進先生に福岡病院の患者データをまとめてみましょうか、と軽い気持ちで提案したのです。すると、勇之進先生はいつものようにとても喜んでくださり、ぜひやってくれとおっしゃって下さいました。勇之進先生は人をその気にさせるのがとても上手な方でした。私もその時はやる気満々になっていたと思います。

しかし、いざ実行となると、その作業は大変でした。常勤の1年間はほとんどそれに費やしたといってもよいほどで、今は取り壊されているでしょうが、旧医局棟の会議室のひとつを借り切って、入院カルテや外来患者台帳などを所狭しと部屋中に広げての突貫工事が始まりました。当時医局長だった梅田先生がとても協力してくださり、我が物顔で部屋を使用することができましたし、病院職員の方々も全員こころよく協力して下さいました。なにしろ病院創設以来25年間の外来入院患者のデータを入力化するのですから、大変な作業でした。私は友人のついでで九大教育学部の学生をアルバイトに雇い、人海戦術で毎日作業の指示を出し続けました。当時はコンピューターに直接入力するような時代ではあ

りません。コード表に数字を記入し、それを業者に依頼してカードにパンチングしてもらいます。その後福岡大学医学部電算室の吉永一彦さんに依頼してカードをコンピューターに読み取る作業をしてもらいました。吉永さんにはそれ以前から統計で毎日のようにお世話になっていましたので、快く協力してもらいました。

この作業をする中で、私は福岡病院の入院カルテのすべてに目を通すことになりました。医者は医局に入ると、先輩諸氏が記録したカルテを紐解いて調査するという作業を課されるのが当時の習わしでしたが、私は大学の医局のみならず、福岡病院という民間の精神病院を代表するような立派な病院のカルテを紐解くという貴重な経験を与えていただいたこととなります。入院記録を調べていると、ついカルテの中身もみたい誘惑にかられます。このようにして当時すでに著名になっておられた先生方の昔懐かしいカルテの記載内容に目を通すという大変刺激的な時間を過ごすことができたのです。福岡病院のカルテは実にきちんと整理されていたのはとても驚きました。おかげで作業は非常にはかどりました。記録にはミスがつきものですから、入退院の日付ミスや患者の登録番号の重複などを探し出してはそれを解決するという作業が当時の私には苦痛というよりも快感だったように思います。当時在職中の職員の中で創設当時からのことをご存じの方が少なからずおられたことが私には心強く、尋ねることでのいろいろな思い出もついでに教えていただきました。

この作業に目処が立った後は入院患者統計をまとめるという本来の目的の研究が待っていました。次々にデータをまとめては学会で報告するようになりました。これらの仕事を全国の学会で発表することを勇之進先生は全面的にサポートして下さいました。この間の仕事は学会誌に6本の論文として掲載され、今でも記録として残っているのはうれしい限りです。

勇之進先生は私が発表する学会には必ず同行して下さい、発表を終えた後は慰労して下さいました。いつも旅行先の美味しい処を探して食べ歩きましたが、当時はまだ若かった私とほとんど変わらないほどに勇之進先生も大食漢でした。その中でもっともうれしかったのは京都で開催された世界社会精神医学会の時のことでした。発表の後、京都の先斗町に出かけて、生まれて初めてお座敷で舞妓さんのいる酒宴の席に誘って下さいました。博多の芸者さんとは違った気品と色気を肌で感じながら、有頂天の気分で幸せな時を過ごしたのを今でも鮮明に記憶しています。今振り返っても先斗町での芸者遊びなど、あの時が最初で最後でした。勇之進先生とのいい思い出をつくっていただいたことに感謝しております。

#### <参考資料>

小林隆児・梅田征夫・佐々木勇之進他(1982). 福岡病院の25年間における入院患者統計 第一報 全入院患者の動態. 九州神経精神医学, 28(3,4), 337-352.

小林隆児・梅田征夫・佐々木勇之進他(1983). 福岡病院の25年間における入院患者統計 第二報 精神分裂病入院患者の動態. 九州神経精神医学, 29, (1), 116-125.

小林隆児・梅田征夫・佐々木勇之進他(1983). 福岡病院の25年間における入院患者統計 第三報 在院患者の動態. 九州神経精神医学, 29(1), 126-132.

Kobayashi, R., Umeda, Y., Sasaki, Y., et al.(1984). Chronological changes in the hospitalization and in the aftercare of schizophrenic patients in Japan. *Proceedings of 10th World Congress of Social Psychiatry (Osaka)*, p.417.

小林隆児・梅田征夫・佐々木勇之進他(1984). 精神分裂病の入院治療

の時代的変遷. 社会精神医学, 7(2), 130-141.

小林隆児・梅田征夫・佐々木勇之進他 (1984). 精神分裂病の入院治療とアフタケアの時代的変遷—精神科初回入院治療例の再入院の防止に焦点を当てて. 精神医学, 26(12), 1269-1279.

(東海大学健康科学部社会福祉学科 教授)

## 佐々木勇之進先生を偲ぶ

小山 達生

昭和58年夏、佐々木先生の自宅で初めてかわした談笑のひとつの  
様子が今でも目にうかびます。

福間中学時代は福間病院へは毎年プラスバンドの一員として、病院内  
での運動会等で演奏させていただきました。既に福間病院の事も佐々木  
勇之進先生の名前も充分に知っておりました。

その先生と県議会議員の一期生として、様々な話をさせていただく機  
会は有意義なことでありました。

以来年に一、二回はそうした機会があり、回を重ねる毎に先生の多  
方面への博識ぶりに驚かされたものでした。23年間、私の政治活動を物  
心両面で支えていただきました。

今でも思い出すのは、平成12年(2000年)秋、駐福岡韓国総領  
事の徐 賢燮(ソ・ヒョンソプ)氏を福間病院に案内したことでしょう。  
徐総領事から「福間病院が韓国内で有名なので、在福岡の時に是非一度  
訪問したい」と私に依頼があったのがきっかけです。佐々木先生も気さ  
くに受け入れていただき、先生の案内で総領事と私はくまなく病院内を  
案内していただきました。なんども日本に来、いろいろな場所をも訪問  
された徐総領事であろうけれども、韓国にはめずらしい開放型精神病院  
を自分の目で直接見るのは初めてであり、様々な質問が院長先生へと続  
きます。二人の熱心な対話を聞くにつれ、福間病院が国内はもちろん国  
外で大きな評価を受けているのが私にも伝わってまいります。何だか私  
自身も温かい感情と言葉にならない喜びに包まれました。

佐々木先生の熱心な説明は総領事の心を熱いものとしていきました。  
先生の思い出は23年間、続々とよみがえってきますが、この日のこと  
が、やはり、最も強いものです。